人文学報 No. 519-2（社会人類学教室 16）
東京都立大学人文科学研究科、2023. 3

小芝居・中芝居役者の芸名継承と歌舞伎役者 岩井小紫の名跡について

浅野　久枝

Ⅰ　はじめに

日本には先祖や親の名の一字または一部分を取って名付けたり、代々同じ名を継承したりする祖名継承の仕来りがある。それは血縁の中だけではなく、茶道や華道、また、邦楽や日本舞踊などの芸事の世界でも、僧侶の法縁関係でも、師匠から弟子に名の継承が行われている。本稿では歌舞伎界の役者の芸名を事例として、その継承方法などを追求したい。しかし、歌舞伎といっても現在存続している大歌舞伎ではなく、現在は消えてしまった小芝居（こしばい）・中芝居（ちゅうしばい）と呼ばれた歌舞伎の世界で活動した役者達の芸名に焦点を当てる。

現在、歌舞伎といえば松竹大歌舞伎のみ存在しているが、拙稿［2022c］で触れたように「小芝居の灯は消えた」といわれつつも、歌舞伎専門で地方興行をしていた小芝居・中芝居[1]の劇団は戦後も数多くあり、その中でも昭和45年（1970）に解散した細川興行と、昭和50年（1975）に解散した三河屋市川市蔵劇団は、最後まで本格的な歌舞伎演目を上演する中芝居劇団として活動を続けていた。

現在、前稿に引き続き、市川市蔵劇団の活動を、元劇団員で市蔵の次女岩井小紫師（本名兼元多恵子氏）と、次男市川団四郎師（本名今井勝三氏）からの聞き取り[2]を基に追跡している。これまで、市蔵劇団の劇団員について、彼らが演じてきた演目について、さらに劇団活動の歴史的変遷や興行形態について、報告を重ねてきた［拙稿2021，2022a，2022b，2022c］。それらの論考の中で、現在活躍中の岩井小紫（兼元多恵子）を「三代目」と記してきたが、それは市蔵劇団の中だけのことであり、実は「岩井小紫」の名跡（みょうせき）は江戸期に遡る。どのような経緯でこの名跡が市蔵劇団の中で継承されるようになったのか、「岩井小紫」の名跡継承の歴史的経緯をわかるかぎり追跡を試みたい。さらに、市川市蔵の名跡についても追跡し、加えて小芝居役者の芸名襲名についても追求する中で、拙稿［2022c］で見た小芝居の世界の具体的あり様をさらに掘り下げることができると考える。

Ⅱ「大和屋岩井小紫」の名跡の系譜

大歌舞伎では現在でも「名跡」とよばれる芸名が親から子、或いは師匠から弟子へと継承されている。本稿ではまず、岩井小紫の名跡から見ていくこととする。「岩井小紫」の名跡は『歌舞伎俳優名跡便覧』［国立劇場調査養成部調査記録課編 2020］（以下『名跡便覧』と略す）には立項されていないが、大歌舞伎の中で継承された名跡である。大歌舞伎における「岩井小紫」の歴史を明らかにし、それに続く「岩井小紫」も見ていきたい。

1 「岩井小紫」の初出　七代目大和屋岩井半四郎の幼名　初代岩井小紫

『日本人名大事典』［下中 1979］には、七代目岩井半四郎（1804－1845）は「文政―弘化時代の若女方の名優。文化元年江戸に生まる。父は五代半四郎で、六代半四郎の弟。初名岩井小紫、前名岩井松之助、岩井紫若、俳名扇朝のち紫若、屋號大和屋、俗稱紫若半四郎、小梅の太夫。文化三年十一月中村座の「膽花雪陸奥」に當今の女童八千代を勤めて初舞臺を蹈む」［秋葉 1979（1938）：383，傍点引用者］とある。この項目を記した秋葉芳美は、延宝年間（1673－1681）から明治年間（1868－1912）の顔見世番付、役割番付、絵本番付、辻番付、特殊番付の膨大なコレクションをした人物で、それは東京大学付属図書館内秋葉文庫に所蔵されている。その中の文化3年（1806）『膽花雪陸奥（かわらぬはなゆきのみちのく）』役割番付[3]を見ると、女童八千代を勤めたのは二代目岩井粂三郎（のちの六代目半四郎、七代目半四郎の兄）であり、女童幾千代を松之助（のちの七代目半四郎）が勤めている。役割についての秋葉の記述は間違いであるものの『膽花雪陸奥』に松之助が出演していることは確かである。翌、文化4年（1807）12月には市村座『相肩添商人（そえてあきんど）』で禿たよりを勤めた［伊原 1960：408］。その後も子役を勤め、文化11年（1814）頃からは前髪役や娘役を勤めた。文政3年（1820）に父五代目半四郎と共に上方に上り、文政5年（1822）には上方で上上白吉に進んだ。同年冬には父共々江戸に戻り、11月森田座で「松之助改岩井紫若」となった。その後、天保15年（1844）3月、中村座にて七代目岩井半四郎を襲名したが、翌弘化2年（1845）4月に没した[4]。

さて、七代目半四郎が文化元年（1804）生まれとすると、文化3年は数え年3歳であり、松之助としての出演が初舞台であるとするならば、「小紫」の名は幼名ということになる。問題は、「初名」の「小紫」の根拠についてである。秋葉は出典を明記していない。野島［1988：140-141］の「岩井半四郎（7代目）」の項目には、七代目半四郎の「幼名＝岩井小紫（初代）」、「5代目岩井半四郎の次男小紫として生まれる」と記される。しかし、その根拠として示された文献を見ても、秋葉の記述以外に「小紫」の記事はなく、根拠が明らかではない。その後に出版された辞典・事典類にも「幼

名小紫」などの記述はあるものの、その出典は明確でない。芸名ではなく幼名（本名）だとすると、男児に「小紫」の名をつけたことに疑問を呈せざるを得ない。とはいえ、子どもが育ちにくい場合、或いは病弱な場合などに女児の名を付ける民俗もある。現時点では「初代岩井小紫＝七代目岩井半四郎」とする根拠を見つけることができないものの、間違いであるとの断定もできない。膨大なコレクションに基づく秋葉の記述であることから、七代目半四郎の幼名が「小紫」であるとする説を信頼したい。『日本人名大事典』以降に編まれた歌舞伎関係の事典類に繰り返し「初代小紫」と記載されていることもあり、初代岩井小紫＝七代目岩井半四郎としておく。歌舞伎界では師匠が自身の幼名や本名や俳名を弟子の芸名として継承させることは良く行われてきた。その後の「岩井小紫」の代々を見る限り、「小紫」の名跡は大和屋岩井半四郎家に所縁の深い名前であることは間違いなかろう。

2　二代目（或いは初代）岩井小紫（のちの二代目松之助）

野島［1988：142］には、天保5年（1834）―弘化5年（1848）頃まで活動した二代目岩井松之助（生没年不明）の初名が「二代目岩井小紫」と記載され、初代岩井紫若（のちの七代目半四郎）の門弟とある。師匠の幼名「小紫」を弟子に襲名させたものであろうか。七代目岩井半四郎を「初代小紫」と数えれば、「二代目小紫」となる。天保5年正月、江戸市村座の『三幅対書始曾我』に若女方として仲の町新子おしん役を「小紫」が勤めたことを伊原［1961：279］が記載している[5]。天保6年（1835）には5月、6月、7月、9月、11月と連続で中村座に出勤しており、天保7年（1836）正月の中村座『市神曾我類湊（えびすそがのみなと）』で曾我二の宮、化粧坂少将、仲丁芸者小千代の三役を勤め、「小紫改メ」二代目岩井松之助を襲名［伊原 1961：323］した。そののち、弘化3年（1846）11月、中村座『三升桝勝関帳貫（さんしょうますかいりのちょうしめ）』で何役も勤めた［石塚 1976：503］が、そののちは不明、と野島［1988：142］にあり、『名跡便覧』［国立劇場調査養成部調査記録課編 2020：110］には、二代目松之助の出勤は弘化5年正月の『俳優紫源氏』まで、とある。師の七代目岩井半四郎が弘化2年（1845）に没しているため、後ろ盾を失ったからであろうか、その後の消息はつかめない。

3　代数なし（或いは二代目または三代目）岩井小紫

早稲田大学演劇博物館浮世絵閲覧システム[6]の資料番号012-0121には天保8年（1837）11月中村座の辻番付に見立てた大判錦絵（版元蔦屋吉蔵、絵師貞寅、彫師石川徳兵衛）の右端に岩井小紫が描かれているが、同じ絵の中に岩井紫若（のちの七代目岩井半四郎）も上に述べた二代目岩井松之助も、大きく描かれている。次に紹介する三代目小紫とは活動期が合わないため、ほんの一時期、弟子筋に「小紫」を名乗らせたものかと思われる。天保8年以後、紫若や松之助の出勤する舞台にも小紫の名は出て来ない。江戸三座に出勤していたとはいえ、代数に数えられるかどうか難しい。

この「小紫」である可能性の高い記録が残っている。弘化3年（1846）に江戸猿若町三丁目八兵衛店住人　岩井小紫こと道三郎が率いる芝居一座が百姓達を役者にして勢多郡板橋村（現群馬県桐生市）で「かくれ芝居」を行ったことが発覚し、取り締まられて処罰された［守屋 1988：104-107］[7]。猿若町の住民ということは江戸三座に出勤していた役者の岩井小紫である可能性が高い。二代目松之助が前名の小紫を名乗ったと考えられなくもないが、二代目松之助が弘化5年（1848）まで大芝居に出勤していたならば、それはありえない。とすれば、天保8年の錦絵に一度だけ登場する「小紫」が、当時禁止されていた「かくれ芝居」で地方興行に行った「小紫」と考えられる。大芝居の名跡を継承した役者が、地方に流れることは珍しいことではなかった。

4　三代目（或いは四代目）大和屋岩井小紫

三代目岩井小紫は嘉永5年（1852）10月生まれで、本名梅田増蔵[8]。大正9年（1920）5月死去。『演藝畫報』の死亡記事［演藝倶楽部編 1920：145］には「八世岩井半四郎の高弟」と記されている。田村［1976：180］や伊原［1962：223］の記録では、明治9年（1876）3月東京中村座『鎌倉山春朝比奈（かまくらやまはるのあさひな）』『偽織大和錦』で師匠半四郎と同座し、江島の局、重助女房おしげなどの四役を勤めているのが初出である。その後も同じく中村座に出勤し、明治10年（1877）6月からは新富座で明治13年（1880）6月まで出勤し続けている。明治9年11月に焼失した新富座が明治11年（1878）に新築開場式を行ったが、その着席順を見ると、最前列右端の半四郎の隣に、二枚目の女方として小紫が着座している［伊原 1962：233］。明治12年（1879）6月4日、新富座で『一谷嫩軍記』をドイツの皇孫ヘンリー親王が見物した際には、若女方として藤の方を勤めた［田村 1976：234-235；伊原 1962：245-246］。岡本綺堂は明治10年頃から約40年間に観た女方の中で記憶に残っている役者の一人に岩井小紫を挙げており、明治13年6月新富座の『霜夜鐘十字辻筮（しもよのかねじゅうじのつじうら）』でお嬢お兼に扮した小紫が強く印象に残っていると述べる［岡本 1920：100-102］。綺堂によれば「新富座に出勤してゐた當時は、半四郎の後継者を以て擬せらるゝほどの娘形であつた」という。渥美清太郎も「師匠と共に新富座へ出勤し、二枚目の女形でなかなか売ったもの。忠臣蔵の一日替りでは小浪や力弥もやったし、延命院の竹川、加賀騒動の玉笹など、この人の初演である。色気はないが美しい顔立ち、芸もうまかった」［渥美 1955：83］という。早稲田大学演劇博物館所蔵の役者絵[9]には渥美が挙げている小浪（明治11年12月）や、中老玉笹（明治12年10月江戸新富座『鏡山錦艶葉（かがみやまにしきのもみじば）』）[10]があり、竹川を演ずる小紫も東京都立中央図書館所蔵の役者絵に描かれている[11]。その他の役柄の役者浮世絵も多数残っているが、ほとんどが明治11年から13年のものである。また、渥美［1955：83］には『千本桜』道行の静御前の扮装をした写真や、『演劇界増刊　明治・大正・昭和　三代の名優』［演劇出版社 1982：48］にも『忠臣蔵』の顔世御前役の写真が登載されている。

明治12年12月「東京府内俳優人名書上」［佐藤 2010：326-360］に、「新富座俳優」

の「下等壱級」[12]として「岩井小紫　嘉永五年十月生」の記載がある。同じ新富座俳優には九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎、八代目岩井半四郎の名があり、彼らは「上等」、三代目中村仲蔵は「中等」で、岩井小紫はそれに続く「下等壱級」である。役者等級の最下位は「下等三級」であるので、やはり二枚目の女方に位置づけられている。早稲田大学所蔵明治14年（1881）の大判錦絵「七福神寶入船」（資料番号012-0618資料名「布袋　嵐璃寛」絵師守川周重）には俳優の給金が載せられている。給金付きの刷り物は見立ての性格が強いが、最高額は団十郎の1,500円、小紫の師匠の半四郎は関脇で1,250円、小紫は前頭十二枚目で800円となっている。明治14年7月刊の「新富座楽屋図」[13]中に、中二階の役者の連名が記され、「半四郎・志う調・小紫・門蔵・繁松・梅三郎・清十郎」とある。以上のように、役者絵に描かれた数[14]、新富座開場式の着席位置、給金の額や役者等級などから見る限り、比較的評価の高い役者であったことがわかる。

しかし、渥美［1955：83］によれば「「箱根の鹿笛」のとき女一件で突然ドロン」したという。『木間星（このまのほし）箱根鹿笛』は明治13年11月、新富座で初演されており［伊原1962：276］、この時に不祥事を起こしたらしい。その後の行動を暗示するような出来事だが、このあと比較的早くに東京へ戻ったらしく、明治14年7月からは春木座、明治15年（1882）正月は猿若座、3月春木座に出勤し、『猿廻門出（さるまわしかどで）の一諷（ひとふし）』の山太夫女房役では「思ひきつて紅粉気をはなれ立派にやつてのけられ評はよき方なり」との評を受けている［田村 1976：323］。

この年2月に師匠八代目半四郎が死去した。その影響かどうかは不明だが、明治15年4月から明治18年（1885）7月千歳座まで小紫の出勤を見ることはできない。明治18年の出勤の後、明治22年（1889）3月の中村座まで、再び出勤記録が途絶える。「幾年も東京の舞臺を踏むことの出来ないやうな運命に囚はれてしまつた。明治廿二年の春にどこからか帰つて来て、久振りで中村座に出勤して團十郎と一座した」が、「容貌（きりょう）もひどく末枯（すが）れたといふ噂で、人気も一向に立たなかつた」［岡本1920：100］という。

東京の舞台から離れた間の記録が福島県伊達郡川俣町に残っている。明治19年（1886）9月、川俣座という芝居小屋のこけら落しで「東京歌舞伎」を招いての奉納芝居を行っているが、その時、市川市蔵、市川松朝の一座に岩井小紫が一座している。こけら落しの記念に書き残された額状の板番付［福島県立博物館編 1995：47］には一座の座頭と思われる市川松朝や看板役者の市川市蔵[15]と同じ大きさの字で岩井小紫の名が書かれている。東京の舞台を知っている人にとっては、まさに「東京歌舞伎が来た」と感じさせたであろう。

しかし、先に見たように、明治22年、小紫はその後一度東京の舞台に戻った。明治22年から明治28年（1895）10月まで、中村座、新富座、市村座、春木座、桐座、深野座とあちこちに出勤している［田村 1976；伊原 1962］。明治23年（1890）2月、警察令第14号東京府令第101号の布達に基いて役者の等級が確定されているが、この時で

もまだ「下の上等」の等級が与えられている［田村 1976：567］。しかし「春木座にも出勤してゐたが、あつても無くてもと云ふくらゐの待遇で、特に目立つた役も付か」ず、「結局再び旅廻りに出てしまつた」［岡本 1920：100］と記されたように、確かに良い役は付いていない。新聞記事によれば、明治26年（1893）7月には春木座出勤を断り、明治27年（1894）6月には信州巡業から一時東京に戻ったが、次には北海道に乗り込む予定である、とある[16]。明治28年（1895）10月新富座で一役のみの出勤が、東京の舞台での最後の記録である［田村 1976：701］。以上のように、明治22年以降は東京の舞台に出たり地方巡業をしたりを繰り返していたようである。野島［1988：135］にも「のち、その美貌が災いして女性問題を起こし舞台より去る」とある。その後、明治32（1899）4月、川越市の小さな芝居小屋で「岩井小紫という大きい看板」が上がっており『先代萩』の政岡などを演じているのを、綺堂は目にしている［岡本 1920：100，1930：6］。また、明治34年（1901）9月24日『東京朝日新聞』朝刊には仙台の仙台座で小紫一座が興行を行った記事が載っている。このように明治30年代半ばまでは地方興行をしていたようだが、その後、役者を廃業して故郷の長野市の権堂にいた［渥美 1955：83；岡本1920：100］が、大正9年5月、70歳で生涯の幕を閉じた。繁華街の権堂にいたということは、何らか芝居に関わって生きていたのであろうか。

綺堂が「最初の勢ひで順調に進んで」いたなら、「今頃は東京の大歌舞伎でも」政岡くらいの役を勤めていたであろうと残念がっているように［岡本 1930：6］、役者としての腕もあり、期待もされた時期があったにもかかわらず、その美貌が災いして女性問題を起こしてしまったとは、残念である。表舞台から姿を消して20年以上経っていたにもかかわらず、『演藝畫報』に死亡記事が載ることから考えると、印象の強い、人気のあった女方であったといえよう。

また、彼が大歌舞伎から出て、地方を巡業する小芝居で活動していた事を考えると、「大和屋岩井小紫」の名を自分の弟子筋に名乗らせ、小芝居の役者が名跡を継承したという可能性は少なからずあると思われる。

以上、大歌舞伎で活躍したことが確実な「岩井小紫」について記した。岩井小紫の名跡について、『名跡便覧』［国立劇場調査養成部調査記録課編2020：110］には二代目岩井松之助の前名として「岩井小紫　天保5・11～」と載るばかりである。三代目小紫は、活動時期は短くとも一時期は嘱望され、活躍した役者である。『名跡便覧』に大和屋岩井小紫の名跡が立項されていないのは解せない[17]。

5　四代目？（或いは五代目）大和屋岩井小紫
（三河屋市川市蔵劇団内の初代大和屋岩井小紫）

ここから先の4名の「岩井小紫」は、これまでにも紹介してきた［拙稿 2021，

2022c]。市蔵劇団内で代々受け継いだ名であるため、ここに「四代目？」として紹介する小紫をこれまでの拙稿では「初代」と記してきたが、大歌舞伎に籍を置いていた可能性もあり、四代目岩井小紫の可能性もある。彼及びその後の「小紫」については拙稿に詳述しているので、記述は重なるが、以下、彼らの概略を記す。

市蔵劇団は三河屋市川市蔵（本名藤田栄）を座頭兼太夫元として活動した中芝居劇団で、昭和50年（1975）まで活動した。劇団員は市蔵の妻の弟妹やその連れ合い、市蔵の娘や息子とその連れ合いらがベースとなり、腕のある役者を上置きにするなどして興行を続けた劇団である。

さてこの「四代目？岩井小紫」であるが、市蔵の実兄初代竹本巽太夫（藤田謙治郎）[18]の妻の妹の夫である。本名、生年、出身地は不明である。藤田家では、彼は大歌舞伎に入り名題になったと伝えている。彼自身「大和屋」を名乗っていた。後に論ずるが、小芝居で大歌舞伎の名跡を勝手に名乗る場合があったとしても、屋号は別なものを付けることが多い。しかし、彼が「大和屋岩井小紫」を名乗り、紋も岩井家の三ツ扇を使っていたことから、三代目小紫或いはその遺族、または半四郎系の師匠と何らかのつながりがあり、名を受け継いでいたのではないかと考えられる。しかし、活躍の場は主に小芝居であったようである。

昭和4年（1929）8月27日の『読売新聞』朝刊記事に「小芝居の達者どころ」として挙がっている岩井小紫は彼であると思われる。松尾国三（当時は嵐三五郎）が昭和7年（1932）にアメリカ公演をした際、この小紫も参加した可能性がある［拙稿2021：86］[19]。昭和11年（1936）9月には、東京本所の寿劇場に於いて「東都初お目見え」をし、『新口村』の梅川、『黒手組助六』の揚巻などを演じている。また、昭和12年（1937）12月から13年（1938）3月までは市松延見子の一座に出演した［小宮 1991：59-60］。昭和14年（1939）前後より、巽太夫に誘われて藤田栄（市川市蔵）が率いる劇団に入ったものと思われる。『壇浦兜軍記』の阿古屋も演じられる役者だった。六代目澤村田之助のエッセイの中に、昭和15年（1940）に地方巡業で新潟に行った際「地方の芝居の超人気役者岩井小紫」が一座し『本朝廿四孝』の八重垣姫を勤めたと記している［澤村 2012：71］。「とにかく美しい女方さんでした」と回想し「この人はのちに大歌舞伎に入」ったと述べているので、昭和15年以降、大歌舞伎に入った（或いは戻った）時期があった可能性がある。しかし終戦間近に応召し、すぐに戦死した。経歴から考えると恐らく30代後半の戦死であろうと推測する。兵隊の格好をして泣きながら楽屋から出征して行った姿を昭和15年生まれの市蔵次男の勝三はおぼろげに覚えている。市蔵や市蔵長女の智子らはこの「小紫」の舞台を覚えており「良い役者だった」と語っていたという。

6　代数無し　三河屋市川市蔵劇団内の二代目大和屋岩井小紫

市蔵（藤田栄）の長女智子は昭和4年（1929）6月生まれ。市蔵は智子を大変に可愛

がり、市松延見子のような女役者に育てるべく、役者としての英才教育を施した。延見子の部屋子として修業した時期もあり、その頃は「延」の一字を貰って「延女（えんじょ）」を名乗った。松本高麗之助の一座では10代にもかかわらず『黒手組助六』で揚巻、細川興行に加入した時は京人形、父の劇団の上置きに五代目嵐珏蔵（のちの五代目嵐璃珏）がいた時の『太功記』で、珏蔵の十次郎を相手に初菊を演じた。『壇浦兜軍記』の阿古屋を演じて三曲もこなし、存在感のある女方を勤められる器量と力量を持っていた。また市蔵劇団内初代小紫の芸をよく見覚えて継承していた。初代小紫の戦死の後、「大和屋岩井小紫」の名跡を智子が継ぎ、「岩井小紫劇団」として智子を看板とする劇団で活動したのが昭和25～26年（1950～51）頃である。智子は昭和26年頃結核を発症し一時期舞台を降板したが、昭和28年（1953）に一児を出産し、病気が小康状態の時期には雪之丞と名乗って出勤した。三代目小紫となった妹の多恵子とともに『二人阿古屋』を上演し得たのも、この時期である。しかし結核が再発し、昭和33年（1958）3月、満28歳で亡くなった。

7　代数無し　三河屋市川市蔵劇団内の三代目大和屋岩井小紫

市蔵の次女多恵子は昭和11年（1936）8月生まれ。数え年5歳の時に『壷坂霊験記』の観音役で初舞台。その後も市川鶴之助や松本高麗之助の一座など、父が加入する劇団の子役として舞台に立った。幼い時から坂東流日本舞踊、長唄、琴、義太夫も習得。母方の叔父二代目中村芝寛から所作事を叩き込まれた。昭和26年（1951）頃、姉の二代目小紫（智子）が結核を発症して一時休業した。そこで、「岩井小紫」の名跡を絶やしたくないと考えた父市蔵は、多恵子が「小紫」を名乗ることができるよう、猛烈な特訓を行った。阿古屋を勤めるためには必須な胡弓を、泣きながら稽古をしてマスターし、弾き語りもできるようになって看板役者「三代目大和屋岩井小紫」として活躍した[20]。

多恵子は昭和32年（1957）には市蔵劇団の劇団員、中村時若（兼元末次＝のち松竹竹本三味線方豊澤時若）と結婚。二児を儲けるが役者を続けた。しかし、次男を預けて興行を続けることに疑問を感じ、昭和46年（1971）頃退団。その直後結核を発症し、つらい闘病生活を送った。体調が戻ってからは、劇団が近畿圏で公演するときは、飛び入り参加することもあった。昭和50年（1975）の市蔵劇団解散後は自宅で三味線や舞踊の教授などをしていたが、振付師としての仕事も始めていた夫の補佐として振付師の活動を始め、現在は演出家兼元多恵子あるいは振付師岩井小紫の名で舞台創造研究所や、滋賀県長浜市の曳山子供歌舞伎や三役修業塾などで歌舞伎の振付指導をしている。

8　代数無し　三河屋市川市蔵劇団内の四代目岩井小紫

市蔵の長男良浩（三河屋市川荒五郎）の妻キミエは大正10年（1921）10月生まれ。

智子が病気休業して看板役者が欠けたため、「岩井小紫」の名を消したくなかった市蔵は、次女多恵子が役者として成長するまでの一時期、北九州の少女歌劇団で邦楽の舞踊（藤間流）を踊っていた伊藤キミエに、臨時で「岩井小紫」を名乗らせた。また多恵子が引退した昭和46年（1971）頃には四代目小紫を名乗ったこともあったが、主に「岩井此の糸」の名で劇団解散まで活動した。劇団解散後、小紫の名を多恵子に返上した。従って、現在活動している「岩井小紫」は市蔵劇団内の三代目岩井小紫の多恵子である。

Ⅲ「市川市蔵」の名跡の系譜

「市川市蔵」というと「播市」すなわち「播磨屋市川市蔵（四代目）」を思い浮かべる方もおいでだろうが、中芝居劇団を率いた市川市蔵は「三河屋」である。藤田栄が襲名した「市川市蔵」の系譜ははっきりしないことが多いが、わかる限り追跡してみた。

1　三河屋市川市蔵の襲名

藤田栄は昭和28年（1953）頃、興行師出浦（義太夫三味線方鶴沢越雄）の仲介[21]で「市川市蔵」を襲名した。屋号は三河屋である。その時には何かの書きものと刀を一振り頂戴してきたという。

2　四代目播磨屋市川市蔵の名跡をめぐる争奪戦

それ以前の「市川市蔵」の名跡については以下のことが判明した。

『名跡便覧』［国立劇場調査養成部調査記録課編2020：42］によれば、三代目播磨屋市川市蔵は二代目尾上多見蔵の次男で元治2年（1865）に死亡した。それ以後、市川市蔵を名乗る役者は出ていなかったが、明治になって市蔵が二人現れ、争いが起きた。明治24年（1891）8月『歌舞伎新報』1277号には以下のような記述がある[22]。

尾上多見蔵次男の市川市蔵没後はその名が長らく絶えていたが、市蔵門弟の市六の仲介で、三代目市蔵の弟子ではない阪東豊作（二代目坂東寿三郎門弟）が明治22年（1889）11月に市蔵の名を襲名した[23]。ところが三代目市蔵の弟子市川姉蔵[24]が苦情を申し立て、争いが起こった。姉蔵は名題として東京中村座に出勤していたが、その後奥州地方を廻っていた。姉蔵が言うには師匠存命中から、自分が改名した後は市蔵の名を譲ると約束してあったので、師匠亡き後許されたも同然であるとして、姉蔵改め市蔵と名乗って地方を廻っていた。しかし大阪において師匠の弟子ではない他門の人が市蔵を名乗るのは「我が一分立難し」と強く主張したのである。豊作の市蔵の方も、元の名に戻るのも「外聞悪し」と二人は長く争った。しかし、播磨屋の家筋に対し「面白からぬ事」であるからと、大阪の顔役某が仲裁に入り、豊作が四代目播磨屋市川市

蔵を名乗り、姉蔵は三代目の俳名松朝を名乗ることで決着した、というのである。

豊作が市蔵を襲名する以前から、姉蔵が市蔵を名乗っていたと思われる記録がある。先にも紹介したが、明治19年（1886）9月、川俣座という芝居小屋のこけら落しで「東京歌舞伎」を招いての奉納芝居を行っている。記念に書き残された額状の板番付［福島県立博物館編 1995：47］には市川市蔵、市川松朝の名がある。姉蔵が師匠の名の市蔵を名乗ったのか、俳名の松朝を名乗ったのかわからないが、豊作の市蔵襲名以前から姉蔵の一座が「市川市蔵」を名乗って地方で活動していたことは明らかである。また、これも先に述べたが、このとき三代目岩井小紫が一座している。この当時から「市蔵」と「小紫」の関わりがあったことは大変に興味深い。

3　藤田栄が引き継いだ「市川市蔵」の名跡

藤田栄が引き継いだ「市川市蔵」は、姉蔵の方が保持していた名跡のようである。多恵子達は父が継承した「市蔵」の先代について「市川市蔵は女癖が悪くて、市に女付けて姉蔵になれとか、姉蔵って言え、って言われた」という話を聞き伝えている。姉蔵は豊作とのもめ事が決着して「松朝」を名乗ったようだが、川俣座の座組のように、おそらく弟子などには「市蔵」を名乗らせていたのではないか。姉蔵の方の「市蔵」の没年は不明だが、その名跡を興行師が預かっており、昭和28年（1853）頃、藤田栄に「市川市蔵」を引き継がせたものと思われる。四代目播磨屋市川市蔵となった豊作は、初代鴈治郎の相手役などとして関西歌舞伎で活躍したが、昭和19年（1944）に死去したので、昭和28年当時「市川市蔵」は存在しない。しかし、藤田栄は屋号を「播磨屋」ではなく「三河屋」を名乗った。藤田栄の出身地が愛知県岡崎なので「三河屋」を名乗ったと伝えられているが、「播磨屋」を名乗ることは憚ったとも考えられる。

Ⅳ　小芝居役者芸名の命名と襲名の方法

以上、「岩井小紫」と「市川市蔵」の代々と名跡の継承を中心に見たが、「岩井小紫」の名跡の場合、大歌舞伎にあった名が小芝居に移動した例である。また、「市川市蔵」の名の場合は興行師を介して、小芝居なりに正式に襲名した事例である。

一般に小芝居の役者の芸名は「適当に付けている」「いい加減なもの」と思われているといって良かろう。確かにそういう面も皆無とはいわないが、それなりのルールもあった。本章では、市蔵劇団内三代目岩井小紫（兼元多恵子）と二代目市川団四郎（今井勝三）からの聞き書きに加え、小芝居役者の自伝、芸談などの文献資料から、小芝居役者の芸名の命名、名跡の襲名について考えていきたい。

1　大歌舞伎役者の巡業先での弟子としての命名

大歌舞伎の役者も地方公演はよく行っていた。歌舞伎役者の名は弟子入りした師匠に命名して貰うか、師匠の一字を貰うのが通常であるが、大歌舞伎役者の巡業先で弟子になり、その場で名前を貰う、という形が小芝居の役者の命名にはよく見られる。それを「旅のお弟子」などという。

六代目尾上菊五郎自身が大分県で旅の弟子を取った話を書いている［尾上 1934：16］。弟子も大勢持つ役者で太夫元もする吉高屋中村高之助（よしだかこうのすけ）が小屋主である大分劇場で菊五郎が旅興行をした折、当初横柄な態度を取っていた高之助が菊五郎の舞台を見て弟子にして欲しいと真剣に頼んだ。「之れには困りましたね、そこで三升さんや彦三郎や牧野その他に相談して、弟子にする事に定め」ると、高之助は羽織袴を着て菊五郎の身の回りの世話を始めた。しかし、その夜に熊本へ発たねばならなかったので時間がなく「師弟の盃事も出来」なかった。が、翌日高之助は自分の芝居を休んで熊本までやってきて、羽織を脱いでまた身の回りの世話を始めたので「私（あつし）は其意気にピーンと感じ」「早速師弟の盃事をして尾上菊左衛門の名を」与え、「来春の亡父追善興行に来るよう」に言ったところ「嬉し涙を流して喜んだ」というのである。実際に菊左衛門は翌年の五代目追善興行に呼ばれて出演している［演藝畫報社編 1935：107］。これを読むと、演技などは見ずに弟子として名前を与えていることがわかる。

五代目上村吉弥は松竹に加入する以前は小芝居で名を馳せた役者であった。大正6年（1917）に杵築歌舞伎の一座　新富座の立女方、中村桂車に入門して、中村桂之助の初名で初舞台を踏んだ。長じて後、市川右團次の弟子市川右田作の紹介で右團次の自宅へ行き「市川右升」の名を頂いたという。

> 親方のお許しをもらい、名前をいただくと言っても、とくにテストも何もありません。旅のお弟子さんですから、知っちゃいない、どうでもやったらええがな、ということでしょう。
>
> お金なんかは別に要求されませんでした。けど、一応、手土産は持って行きましたね。どこかの世界みたいに、名前をもらうのに、なんぼといった相場みたいなものはありません。［西村 1993：53］
>
> それで、右団次さんから書いたもんをくれましてね。自分の弟子として「市川右升」の芸名を使うことを許すといった内容です。ただし、名前を汚すようなことがあったときは、それを取り上げる、といったことも、たしか書いてあった。そのときは、つまり、破門するということです。［西村 1993：54］

旅先ではないが、入門後に住み込みで修業するわけでもなく「右升」の名前を貰っているので、「旅のお弟子」のようなものだった[25]。

吉弥（右升）の最初の師匠の中村桂車は「初代の中村鴈治郎が九州へ巡業に来たと

き、一座していた中村魁車の番頭さんを知っている人がいた。その手づるで、別府の巡業地で名前をいただいたと、言ってましたね」。桂車は「大阪に出て働いたことはありません」が、中村魁車から「名前だけ」もらった、旅の弟子であった［西村 1993：32-33，53-54］。

昭和初期の小芝居では座頭格で活躍した市川右田次という役者がいた。吉弥は右升時代に右田次と一座しているが、この右田次は右團次の旅の弟子であるという。吉弥（右升）によれば「なかなかしっかりした役者さんで」、右團次から道頓堀の「松竹の舞台へ出ないか」と誘われたにもかかわらず断って「身体の続くかぎり、自分の一座で自分のやりたい芝居をしたほうがいい」と、岡山へ帰ったという。

> 岡山の小芝居で終わった人やが、大柄で、色が白く、ぽてっとして、それでいて均整がとれていましたね。主に立役をやって、女形なら『先代萩』の政岡もできた人でした。右田次のように、旅の芝居にもいい役者がたくさんいましたね。小芝居しか回らない役者やけど、いまから思いますと、いまの松竹の役者はんにあんまりヒケをとらん人がたくさん働いていました。［西村 1993：47-48］

その他、昭和19年（1944）当時、岡山の末広座の座頭をしていた松本錦之助は七代目幸四郎の旅の弟子だった［西村 1993：68］。

しかし「道頓堀の大看板の役者から名前をもらったからといって、小芝居での扱いは変わりませんね。そこが松竹と違って、やっぱり実力本位の世界ですから。お客さんがやんや、やんやと、喜んでくれたほうが、給料はどんどん上がる仕組み」［西村 1993：53-54］だったと吉弥は語っている。

2　興行師を介しての襲名

三河屋市川市蔵の襲名で見たように、小芝居役者の襲名においても興行師が介在することが多かったらしい。各地の興行師は芸名、名跡を保持していたか、遺族から預かっていたようである。芸名の譲渡に当たって金銭が介在したのかどうか、明らかではない。

しかし、正式に襲名した証は出されていた。先に、吉弥が右團次から右升の名を頂いたとき、書き付けを貰ったことを述べていたが、藤田栄が市川市蔵を襲名したとき、書き付けと刀を一振り頂いてきたことを多恵子は記憶している。また、岐阜県各務原で子供歌舞伎などの振付指導を行っていた大谷廣右衛門（大正15年頃生）は、兄と共に大歌舞伎の大谷某の弟子となり、兄は八代目大谷友之助、弟は大谷廣右衛門（代数不明）の名を正式に襲名した。彼らの遺族によれば、二人とも正式な書き付けを所持していた［拙稿 2015：8，23］という。大谷友之助一座は全国を巡業していた。ちなみに「廣右衛門」の名跡は歴史もある大きな名である。

「市川市蔵」や「大谷廣右衛門」といった大歌舞伎で通用するような名跡の場合、正式にそれを証明する書き付けや品が、名前と共に譲渡されていたことがわかる。

3　劇団内での名跡継承

大歌舞伎では親から息子や親族、姻族、或いは一門の中で芸名が継承されてきた。小芝居には門閥はないので、そのような形での継承は少ないが、役者一家の場合は親から子へ、或いは兄弟姉妹の間で名が引き継がれることがあった。例えば初代澤村曙當（本名山下峰松）は愛知県西尾市の豪農の息子であったが、芝居好きが高じて中芝居の役者となり、初代紀伊国屋澤村曙當を名乗り太夫元としても活動した。峰松の息子山下重吉（大正9年生）は幼い頃から舞台を踏み、二代目紀ノ國屋澤村曙當として細川興行に在籍した［拙稿 2015：11］。彼は大歌舞伎にも詳しかった見巧者の小池橇歌[26]が評価するほどの中芝居役者[27]となった。初代曙當の命名経緯は不明だが、このように親から子へと名が継承されることはあった。

市蔵劇団や市蔵（藤田栄）の岳父備前屋中村芝寛（大森運平）の一座の場合は、親子や兄弟をベースにして運営していた劇団であったため、親から子、或いは親族や姻族など、劇団内での芸名の継承が非常に多く行われた。

「備前屋中村芝寛」の場合、大森運平（初代芝寛）から息子の大森栄へその名が受け継がれ、大森栄は二代目中村芝寛を名乗り、その後、大森栄の甥である勝三（藤田栄の次男）が三代目中村芝寛を名乗った。また、勝三は、三代目芝寛を襲名する以前は、父が若い頃に名乗っていた嵐傳二郎の名を名乗った時期もあった。また、多恵子（藤田栄次女）は市蔵劇団内三代目岩井小紫を名乗る以前は、姉智子が市松延見子から貰った延女の名を継承して名乗っていた。

「大和屋岩井小紫」の名跡は先ほど詳述したように、四代目？大和屋岩井小紫戦死の後、義理の姪にあたる智子が市蔵劇団内の二代目大和屋岩井小紫を襲名し、智子の後、妹の多恵子が三代目を襲名。多恵子引退後は藤田栄長男良浩の嫁のキミエが四代目を名乗った時期もあった。劇団内の「小紫」の襲名に当たっては、襲名披露などは行わなかったが、智子は叔父の小紫の芸や型を継承し、また、多恵子は姉の後見をしながら芸を受け継いだ。名前だけでなく芸の継承も行われたのである。

また、北海道で活躍した初代市川団四郎（今井由吉）の名は、娘婿となった勝三が「二代目市川団四郎」を襲名した。昭和46年（1971）頃のことだが、その頃の市蔵劇団の番付[28]には二代目襲名の口上などが載せられている。

以上のように、小芝居劇団の中でも大歌舞伎と同様、親から子などへ芸名、名跡が継承されることがあった。

4　師匠の名の継承

師匠から弟子へ名前が譲られることは、当然あった。弟子に名前を譲るという口約

束があっても、形になっているものを作っていない場合は、「市川市蔵」の襲名で姉蔵と豊作がもめたような事例もあった。市蔵劇団内でいえば、関西の青年歌舞伎で初代扇雀（二代目鴈治郎）の女房役であった中村福太郎は、昭和39年（1964）から市蔵劇団に所属した。中村時若（兼元末次＝豊澤時若）は福太郎に心服し、弟子のように身の回りの世話をし、芸の継承もした。そのため、福太郎が存命中、自分の後、時若に二代目を名乗る許可を与えていた。初代は昭和45年（1970）10月、脳溢血で突然亡くなったが、その後、時若は二代目中村福太郎を名乗って活動した[29]。

時若の最初の師匠は女役者の中村時子[30]だが、その後、様々な小芝居の劇団に在籍した。細川興行に在籍していた時代には初代扇雀の弟子である中村扇助の弟子になった。師匠の許可は得ていなかったようだが、昭和31年（1956）頃、市蔵劇団に加入したての頃は「中村扇助」を名乗った。このように、弟子として付いたことがあれば、その後師匠の名を名乗ることは小芝居ではままあったと勝三は語る。

5　大歌舞伎の役者名を勝手に使用

現存する市蔵劇団の番付[31]を見ると「尾上菊之助」「中村福助」などの名も見ることができる。しかし「京極屋　尾上菊之助」「備前屋　中村福助」或いは「京屋　中村福助」と書かれており、「音羽屋」「高砂屋」を使わず、屋号を変えて出演している。同名の場合、大歌舞伎でも、別屋号を付して区別することはあった。例えば近年まで「中村福助」の名は「成駒屋」と「高砂屋」で並立していたが、屋号で区別していた。混乱を避ける方便でもあるので、小芝居の「京極屋　尾上菊之助」はあり得ることである。

しかしながら、小芝居では、やはり観客を集めるためには多少のハッタリも必要であったろう。その場合でも、屋号を変えてそれを番付に明記し、大歌舞伎に対して配慮していたことを見て取ることができる。

6　大歌舞伎のネームバリューの利用

姓は違うが、有名な役者と同じ名を使う役者もいた。これもある意味では大歌舞伎役者名の集客力を狙ったということができよう。

「尾上梅玉」「片岡延若」などがそれである。「梅玉」「延若」と聞けば「中村梅玉」「實川延若」を思い浮かべるであろう。この命名には首をかしげる方もいると思うが、尾上梅玉も片岡延若も小芝居の世界ではなかなかの腕を持っていた役者である。

尾上梅玉は細川興行の劇団に長く在籍し、市川右田次の女房役を長く勤めた。前進座の五代目河原崎國太郎に容貌がそっくりだが、上方歌舞伎の型を受け継いでおり、『重の井子別れ』の重の井や『熊谷陣屋』の相模、『どんどろ』のお弓といった、立女方の役をよくこなした。小池の劇評［拙稿 2023a］によれば、『野崎村』のおみつについて「梅玉のお光、前のナマスの件りの紙を折って眉をかくす辺りの色気、お染が

出てから久松との嫉妬のいさかいの蓮葉、後段、尼になっての諦め、幕切れに、更に娘気にかえって久作に縋って泣く、と云った心理過程が巧みに表現されている」と褒めている。

片岡延若も昭和2年（1927）から片岡延若劇団を立ち上げ、一座を率いて昭和30年代まで全国を廻っていた。食満南北が延若のことを「よく研究している」と褒めた［演劇画報編集部 1957：7］といい、また、多恵子によれば「中芝居の方では「延若さん」と言えば實川延若ではなくて、この片岡延若さん」を指すほど名は通っていたという。昭和35年（1960）頃より市蔵劇団に加入し、重の井などの立女方も、清玄や法界坊といった立役もこなす役者だった。昭和40年（1965）頃、女役者の市川右鶴と二人で市蔵劇団を退団して一座を組んだ。北海道での人気が高く、主に北海道を廻った［拙稿 2021：75-76］。

「梅玉」や「延若」といった、ネームバリューのある名前を命名した理由は不明とするほかはない。集客を狙った部分がないともいえないが、たとえ間違って見に来た観客をも、失望させない腕があったのが、この二人であった。

また、名前の読み方の音（おん）が紛らわしい名前もあった。昭和40年（1965）頃に長浜曳山祭の子供芝居の振付を行っている中村幹三郎は、現岐阜県美濃市出身。昭和20年（1945）前後は美濃市を本拠として全国を興行していた豊竹興行社に在籍していたが、本人は「南座にも出たことがある」と話していたという［拙稿 2015：8］。管見の昭和17年（1942）1月、名古屋歌舞伎座の市松延見子・中村福助（五代目高砂屋）合同一座の番付[32]に中村幹三郎が参加している。名の読み方は「なかむらかんざぶろう」である。音だけ聞くと別の漢字を思い浮かべてしまう。この名の命名理由もわからないが、集客を狙ったのかもしれない。しかし延見子一座にいたということは「幹三郎」は、それなりの腕を持っていた役者だったのではないかと思われる。

Ⅴ　考察―小芝居役者の命名・襲名の特徴

1　大歌舞伎と小芝居の交流と大歌舞伎の仕来りの踏襲

三代目大和屋岩井小紫は大歌舞伎で活躍後、大歌舞伎と小芝居とを行き来した後、小芝居の世界で終わった。四代目？岩井小紫と三代目に接点があるかどうかは不明だが、四代目？岩井小紫が堂々と「大和屋」を名乗り、三ツ扇の紋を使っていたことを考えると、何らかの形で大歌舞伎起源の由緒ある名跡を継承したものと考える。「市川市蔵」も元々大歌舞伎の名跡であった。四代目播磨屋市川市蔵が上方の大歌舞伎で活躍しただけに、藤田栄が襲名した「市川市蔵」は小芝居の芸名のように思われてしまうが、「市蔵」を名乗った市川姉蔵は三代目播磨屋市川市蔵の弟子で名題役者であり、明治12年（1879）頃には東京で活動していた。姉蔵が大歌舞伎から小芝居へと活動の場を移したことにより、大歌舞伎の名跡が小芝居の世界で受け継がれることに

なったのである。藤田栄の長男が名乗った「三河屋市川荒五郎」も上方歌舞伎の名跡である。四代目荒五郎は昭和5年（1930）に没しており、最後に荒五郎を名乗ったとされるのは、上方の門閥出身でありながら関東の小芝居に行き、「横浜の團十郎」と呼ばれた市川荒二郎［国立劇場調査養成部調査記録課編 2020：39］である。彼は昭和10年（1935）10月に死去しており、昭和10年から平成26年（2014）まで大歌舞伎で「荒五郎」を名乗る役者はいない。市蔵劇団にどのような経緯で「荒五郎」の名が受け継がれたかの伝承はないが、「市川市蔵」襲名と同じように戦後の昭和20年代に興行師が保持していた名跡を受け継いだのではないかと思われる。

上方歌舞伎界では大歌舞伎と小芝居の交流、役者の移動が東京に比べて多かったことが知られているが、こうした役者の移動により、小芝居で受け継がれるようになった名跡もあったのであろう。このようにして「大和屋岩井小紫」の名跡も大歌舞伎から小芝居に流れ、市川市蔵劇団内で継承された。

その継承の仕方は大歌舞伎同様、親族関係の中で継承された。小芝居の世界に門閥はなくともやはり太夫元や座頭の子供は粗末に扱われず、その劇団内での地位は上位に位置する［拙稿 2022c：91-92，95］。「大和屋岩井小紫」の名跡は、市蔵劇団内での大切な名前として「家」の中で継承され、またその芸も継承された。「中村芝寛」にしても、「市川団四郎」にしても、親から子へ芸名が継承された。その意味では、名跡の継承においても、大歌舞伎の仕来りを踏襲してきたということができよう。

小芝居役者の芸名は「適当に」付けているという認識が多かったと思われる。確かに市川少女歌舞伎を率いた市川升十郎が一時期座員となっていた市川団吉一座の団吉は「此の名は自分で附けた藝名だから他人に横槍を入れられる心配はない」［市川 1983：107-108］と言い、団吉の名を升十郎に譲っている。このように勝手に名乗り、自由に譲る事例が無いとは言わない。が、「市川市蔵」や「大谷友之助」「大谷廣右衛門」の襲名のように、それぞれの興行師が仲介して襲名し、その時にはその正当性を証明する証書を渡されている事例もある。金銭も当然介在したと思われるが、勝手に名乗っているわけではなく、しっかりとした手続きを踏んで名跡を受け継いでいた場合もあることがわかる。

2　大歌舞伎の名跡のバリュー

大歌舞伎の場合は弟子入りすれば師匠（親方）の家に住み込むなりして、役者修業をするのだが、小芝居役者の場合、大歌舞伎役者の巡業中に名前を貰うという独特の形があった。「旅のお弟子」の場合、実技試験はないので、芸風や型を受け継いでいるわけではない。また、師匠にもよるだろうが高額な金銭が必要、ということもなかったようである。しかしその場合でも、師弟の盃を交わしたり、弟子であるという書き付けを頂いたりと、それなりの儀式はあり、また、「名を汚すようなこと」があれば破門もされた。小芝居役者にしてみれば「大看板の弟子」の名は大変な集客力が

あった。まさにネームのバリューは大きかったのである。

ネームバリューを利用するという意味では大歌舞伎の有名どころの名を勝手に使うということが行われたのも事実である。小芝居の世界では「尾上菊五郎」などの大名跡を名乗る偽物が数多く出ていたという[33]。また、先に見たように自分の師匠の名をとくに許しを得ずに使ったり、屋号を変えて有名役者の名を使ったりすることもあり、「梅玉」「延若」といった紛らわしい名を使っていた役者がいたことも事実である。しかし彼らの名誉のために繰り返して述べるが、「梅玉」「延若」は、ネームバリューで惹きつけられてやってきた観客がいたとしても、観客を落胆させない腕のある役者であった。

Ⅵ　おわりに

中芝居、小芝居役者の活動も記録が少ないが、その命名や襲名についても資料は少ない。今回わずかな資料から見てきたが、その中から以下のような指摘をすることができよう。

すなわち、小芝居の世界では、客を楽しませる工夫や集客する工夫の一つとして、とくに芸風を継承する手続きもなく「旅の弟子」という形で大歌舞伎の有名役者の弟子としての芸名を頂いて活動したり、或いは、大歌舞伎役者のネームバリューも憚りながら利用したりすることもあった。大歌舞伎役者の芸名を勝手に名乗るという事例も確かにあった。

しかし、歌舞伎専門で活動していた小芝居の劇団内では、興行師が介在して襲名が行われたり、極め書きの書類が渡されたりしていたこともわかった。拙稿［2022a、b、c］で触れてきたように、小芝居の世界では、役者の交流、演目や芸の継承など、大歌舞伎との交流が少なからずあった。その中で、「岩井小紫」のように、大歌舞伎の名跡が中芝居、小芝居に移動し、その世界で継承されるようになることもあった。さらにその継承のされ方は、大歌舞伎と似通った仕来りで行われていたことが、今回明らかにできたと思う。

小芝居の芸名は、いい加減に、勝手に付けていたものばかりではなく、ある一定の慎みがあり、また、歌舞伎界の仕来りに準じている事例もあったことは、中芝居、小芝居の評価において、一考されるべき問題であると考える。

本稿は文科省科学研究費補助金2019年度 基盤研究（C）19K01235「関西系小芝居（中芝居）の活動実態と地芝居との影響関係―地芝居の価値再発見に向けて」の補助を受けて進めている研究の一部である。

謝辞

岩井小紫師、市川団四郎師とそのご家族には長年に亙り多大なご迷惑をかけ、またご協力を頂き感謝申し上げます。本研究開始当時に一緒にインタヴューを行った濱千代早由美氏、資料の提供のみならず資料収集の方法まで事細かなアドバイスを頂いた歌舞伎研究家小池章太郎氏、及び資料提供いただいた京都文教大学教授鵜飼正樹氏、立命館大学名誉教授奥村功氏、元福島県立博物館学芸員佐々木長生氏、松竹（株）制作部松岡亮氏、澤村曙當子息山下博志氏には深く感謝申し上げます。

注

1）大歌舞伎のワンランク下に位置される歌舞伎劇団を、関東では小芝居、関西では中芝居と呼ぶことが多かったが、関東では小芝居の中では上位に位置する劇団を中芝居と呼ぶこともあるため、定義は難しい。本稿で取り上げる市川市蔵劇団の劇団員たちは、自分たちの芝居を「中芝居」と考えてきた。しかし、小芝居と中芝居は分けがたい場合が多いので、以下の文章の中では、「中芝居」と自称している事柄以外は基本的に「小芝居」と記す。また、本文中の人名に関しては旧字を使用すること、および基本的に敬称は省略することをお断りしておく。

2）2011年から兼元多恵子氏（岩井小紫師）と今井勝三氏（市川団四郎師）に数多くの聞取り調査を実施し、とくに小紫師に対しては50回以上にわたる聞書きを実施している。なお、2011～17年頃まで濱千代早由美氏とともに行った調査データも含まれている。

3）小池章太郎氏所蔵の秋葉芳美コレクション『劇代集』所収の紋（辻）番付を参照した。東京大学付属図書館内秋葉文庫の資料 書名：絵本番附集 請求記号：0030021001には子役の松之助の名はない。

4）七代目半四郎関連の出典は以下のようである。［秋葉 1979：383；石塚 1976：452，490；伊原 1960：408，539，568，569，571，1961：70，72，85，93，95，477，485；国立劇場調査養成部調査記録課編 2020：109］

5）『名跡便覧』［国立劇場調査養成部調査記録課編 2020：110］に二代目岩井松之助の前名として載せられている「岩井小紫」が、『名跡便覧』に唯一記載された「岩井小紫」の名跡である。そこには、小紫の活動期を天保5年11月から天保6年までとし、天保7年正月に松之助を襲名したと記載されているが、伊原［1961：279］、石塚［1976：250］にあるように、二代目小紫の活動開始は天保5年正月である。なお、二代目松之助の襲名を野島［1988：142］は天保8年としているが、伊原［1961：323］の記録によった。

6）早稲田大学文化資源データベース

7）この事件についての原史料は、千々和［1959：11-14］および萩原［1957：54-61］に掲載されている。

8）野島［1988：135］には「嘉永4年生まれ」とあるが、佐藤［2010：326-360］の「資料Ⅰ「東京府内俳優人名書上」翻刻」の記述によった。本名は磯田［1895：3］による。

9）資料番号101-0612，101-0607の配役の項の記述では「岩井小紫」の代数は「0」と記されているが、三代目岩井小紫と思われる。

10）早稲田大学文化資源データベース 資料番号007-1294（A），012-1299および007-0702，007-0705，100-7481，100-7487，100-7490。ちなみに012-1299には「平蔵娘小浪〈3〉岩井小紫」とあるが、「平蔵」ではなく「本蔵」の誤記と思われる。

11）東京都立図書館TOKYOアーカイブ 資料番号M348-6

12）明治期から昭和初期まで役者には等級が定められた鑑札が出された。

13）松岡亮氏個人蔵の「新富座楽屋図」を閲覧した。

14）早稲田大学演劇博物館には、三代目小紫を描いた役者絵は31枚（重複を含む）、東京都立図書館には15枚

（重複を含む）が所蔵されている。

15）昭和になって活動した三河屋市川市蔵は、この市蔵の名跡を継承したと思われる。後述。

16）明治26年7月28日『読売新聞』朝刊「春木座出勤の岩井小紫ハ都合に依り同座次興行の出勤を断りたり」、明治27年6月25日『読売新聞』朝刊「先頃信州地方へ出稼ぎせし岩井小紫ハ一度帰京して後北海道へ乗り込む心算なりと」とある。

17）是非、立項されることを望む。

18）松竹の竹本所属の二代目巽太夫が襲名する際、初代巽太夫の遺族である藤田栄の長男良浩（市川荒五郎）の長男（当時国立劇場研修生）に襲名の許可を求める打診があったという。初代巽太夫は松竹の竹本に所属していたことが確実である。

19）拙稿［2021：86］には昭和6年と記したが昭和7年の間違いであることが判明した。訂正したい。

20）智子も多恵子も、名跡と同時に大和屋の屋号も三ツ扇の紋も引き継いだ。

21）或いは興行師水野かもしれないという。

22）以下、『歌舞伎新報』の記事［歌舞伎新報社編 1891］に加え、『名跡便覧』［国立劇場調査養成部調査記録課編 2020：42］の記述も含めて筆者が要約した。

23）豊作自身、師匠寿三郎の名跡を寿三郎の弟子でもなく由縁もない嵐班丸に継承されてしまい、憤慨したようである［歌舞伎新報社編 1889；国立劇場調査養成部調査記録課編 2020：42-43］。

24）嘉永3年（1850）生。明治12年（1879）当時、久松座に所属し、下等壱級の鑑札を受けている［佐藤 2010：331］。野島［1988：61］に載る「市川姉蔵」は明治13年（1880）三歳で三代目市蔵の養子となり初舞台を踏む、とあるが、明治13年にはすでに三代目は没している。野島の記述する「姉蔵」は別の「姉蔵」である。

25）右升はその後、右團次の夏巡業に一座することがあり、その時は「私にとっては初めての親方勤めでしたから、そらもうキリキリ舞いさせられましたよ」［西村 1993：56］という。

26）小池橇歌（1901～75）は本名小池禮三。歌舞伎研究者小池章太郎氏の父で、浜松市にあった料亭柳川亭二代目主人。大正・昭和期に亙り、大歌舞伎も小芝居も数多く鑑賞した見巧者。長唄三味線もプロはだしの腕前だった。矢島梨花を中心とした歌舞伎愛好家による肉筆の回覧型の月刊同人誌『劇友』の同人である。『劇友』誌上に載せた細川興行の橇歌による劇評を、筆者が翻刻した［拙稿 2023a］。

27）小池橇歌の劇評によれば、「曙當の久松は、あの躯をコロしてよく演っている。蔵前の方の久松を観た私の劇友のK君も、この優のこの役を推奨していた。お光の二度目の出で、下手で右膝へ手を重ねて坐った形など、なるべくスンナリした形にみせる用意がうかがわれる」［拙稿 2023a］などと評価している。

28）奥村功氏所蔵の市川市蔵劇団番付。

29）初代福太郎の死亡年は1970年10月12日『朝日新聞』東京夕刊「ある老旅役者の死」による。川西［1977：184］の中に嵐三五郎の談話として、市蔵劇団の中村福太郎は新鋭歌舞伎にいた初代福太郎とは「まるで無縁」との記述があるが、本文で述べたように初代福太郎から襲名を許されており、「勝手に名前を拝借した」ものではない。

30）時子や右鶴、小紫姉妹など、歌舞伎を専門にして活躍した女役者については別項［拙稿 2023b］で論じた。

31）奥村功氏所蔵の市川市蔵劇団番付。

32）名古屋歌舞伎座［1942］による。市松延見子・中村福助の他には嵐珏蔵（のちの五代目嵐璃珏）も加入している。

33）九州全体の俳優協会を任された尾上菊左衛門が「偽名を使ふいかさまな者があつたら首を引つこ抜いてやります」［尾上 1934：16］と豪語していることからも、菊五郎を名乗る役者が多かったことが分かる。

参照文献

浅野久枝 2015「子供歌舞伎振付師の系譜からみえる長浜曳山祭地芝居の傾向」民俗芸能学会『民俗芸能研究』59：4-25.

――― 2021「昭和五十年まで活動した中芝居劇団 市川市蔵劇団の軌跡 その一 ――小芝居の歌舞伎で活躍

した役者家族とその周辺――」京都精華大学『京都精華大学紀要』54：71-88.
――― 2022a「昭和五十年まで活動した中芝居劇団 市川市蔵劇団の軌跡 その二 ――中芝居・小芝居で上演された歌舞伎演目の特徴――」京都精華大学『京都精華大学紀要』55：19-32.
――― 2022b「歌舞伎演目における小芝居・中芝居独特の演出とその保持について ――昭和五十年まで活動した中芝居劇団 市川市蔵劇団の軌跡――」同志社女子大学『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』22：47-73.
――― 2022c「昭和50年まで活動した中芝居劇団 市川市蔵劇団の活動と興行形態の変遷 ――小芝居・中芝居劇団の活動実態――」東京都立大学人文科学研究科『人文学報』No. 518-2（社会人類学分野15）：79-98.
――― 2023a（印刷中）「劇評から見る中芝居劇団 細川興行の演技の実態 ――同人誌『劇友』誌上「歌舞伎劇卅七種を観る　小池橇歌」翻刻――」同志社女子大学『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』23.
――― 2023b（印刷中）「昭和期まで活躍した女性歌舞伎役者たち ――女役者の動向と消長――」京都精華大学『京都精華大学紀要』56.
秋葉芳美 1979（1938）「岩井半四郎」項目，下中邦彦編『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』平凡社 pp.382-384.
渥美清太郎 1955「岩井小紫」利倉幸一他編『演劇界増刊 百人の歌舞伎俳優』第13巻第8号，演劇出版社 pp.83.
石塚豊芥子 1976（1907）『歌舞妓年代記続編』鳳出版.
磯田健一郎編 1895『東京俳優名鑑』磯田健一郎発行・滑稽堂発売.
市川市蔵劇団 日付不詳（1954頃と推定）『東京大歌舞伎 市川市蔵劇団 配役番附』（筆者個人蔵）.
――― 日付不詳（1959頃と推定）『東京大歌舞伎 市川市蔵劇団 配役番附（奥村功氏個人蔵）.
――― 日付不詳（1960頃と推定）『東京大歌舞伎 市川市蔵劇団 配役番附』（奥村功氏個人蔵）.
――― 日付不詳（1971頃と推定）『東京大歌舞伎 市川団四郎襲名披露』（奥村功氏個人蔵）.
――― 日付不詳（1971頃と推定）『東京大歌舞伎』（奥村功氏個人蔵）.
市川升十郎 1983『かぶき人生』豊文堂.
伊原敏郎 1960『歌舞伎年表』第5巻 岩波書店.
――― 1961『歌舞伎年表』第6巻 岩波書店.
――― 1962『歌舞伎年表』第7巻 岩波書店.
演藝畫報社編 1935「尾上菊左衛門」演藝畫報社『演藝畫報』昭和10年4月号 pp.107.
演藝倶楽部編 1920「演藝消息 岩井小紫死す」演藝倶楽部『演藝畫報』大正9年7月号 pp.145.
演劇画報編集部 1957「誰にも楽しめる歌舞伎 片岡延若劇団」栗田光彦編集制作『演劇画報』関西藝能あけぼの会事務局発行 昭和32年4月号 pp.7.
演劇出版社 1982『演劇界増刊 明治・大正・昭和 三代の名優』第40巻第13号 pp.48.
岡本綺堂 1920「私の観た女形」演藝倶楽部『演藝畫報』大正9年10月号 pp.97-103.
――― 1930「明治時代の女形」演藝畫報社『演藝畫報』昭和5年7月号 pp.2-6.
尾上菊五郎 1934「弟子にした劇場主」演藝畫報社『演藝畫報』昭和9年9月号 pp.16.
歌舞伎新報社編 1889「関西通信」『歌舞伎新報』1058号所収.
――― 1891「市蔵が二人」『歌舞伎新報』1277号所収.
川西到 1977「九州の旅役者たち」留美坂英編『定本嘉穂劇場物語』創思社 pp.171-192.
国立劇場調査養成部調査記録課編2020『歌舞伎俳優名跡便覧［第五次修訂版］』日本芸術文化振興会発行.
小宮麒一 1991「寿劇場興行総録」小宮麒一編『歌舞伎・新派・新国劇配役総覧』第3版 pp.58-70.
澤村田之助 2012「銀座つれづれ」銀座百店会発行『銀座百点』No.687，2012年2月号 pp.70-73.
下中邦彦編 1979（1938）『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』第6巻 平凡社.
佐藤かつら 2010『歌舞伎の幕末・明治 小芝居の時代』ぺりかん社.
田村成義 1976（1922）『続続歌舞伎年代記 乾巻』鳳出版.
千々和実 1959『近世文書読解の手引き―はじめて近世文書を読む人の為に―』いずみ書房.
名古屋歌舞伎座 1942『市松延見子 中村福助 大一座（昭和一七年一月一日初日番付）』（筆者個人蔵）.

西村彰朗編著 1993『一方の花　五代目上村吉弥の生涯』京都新聞社.
野島寿三郎編 1988『歌舞伎人名事典』日外アソシエーツ株式会社.
萩原進 1957『郷土芸能と行事―群馬県―』煥乎堂.
福島県立博物館編 1995『企画展 村芝居の世界』（企画展図録）.
守屋毅 1988『村芝居 近世文化史の裾野から』平凡社.

データベース

東京大学付属図書館内秋葉文庫　https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/collectionall/akiba
東京都立図書館TOKYOアーカイブ　https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/top
早稲田大学文化資源データベース　https://archive.waseda.jp/